

鈴木商店退社の声明書

男子の進退

久 琢 磨

昔から「飛ぶ鳥も後をに」すな」とい、「男子は進退を明らかにすべし」といわれたごとく、我々の青年時代には男子はつねに俯仰天地に恥ぢざる公明正大なる行動に終始しいやくも世の誤解をうけ非難をあびるごとき行動をする勿れ、自分の行動には責任をもて、就中その進退を決するときには、男らしく公明正大に進退の理を明にすべしと教えられ我々はこれをもつて金科玉条として厳守した。我が恩師水島先生は「商人たるまゝに人間たれ」と常に教えられた。僕は恩師の教えを人生のモットウとして生きてきたつもりだ。

諸君もご承知のごとく、僕は海外旅行で単身英領印度、ビルマ、マラヤ等を視察したのだが、カルカッタで三井物産の栗山先輩に非常にお世話になり、同氏のご斡旋で卒業後は三井物産に入社する約束をして帰った。いよいよ卒業の

条件留任を嘆願することに決議し、熱涙をもつて認めたる嘆願書に各自血判的に自署名し以つて全店三千有余の健児が如何に敬慕信頼せるかを披瀝するとともに一方において尊台以下七名を嘆願委員として推挙し万難を排し万策をつくして極力無条件御留任を御快諾下さるよう御尽力を御願し更に不幸にして若し形勢非なる時はあたかも薩南一千の健児が西郷先生を厭起せしめたる如く挙店一致団結の巨弾をもつて総ての外障を撃退し今一度全店のために御留任あらんことをお願いする覚悟にて、是非とも再度御協議願いたき旨を切望せしところ、尊台等においても吾人の熱意の存するところを御賢察下され斯の如き場合は必ず御協議すべしと明言せられたり、因つて吾人は全部を諸彦に御一任し尊台等の御努力により一刻も速に御解決せられんことを祈りて今日に到り、抑も本問題は鈴木商店開店以来の致命的重大問題にして之が成否は直ちに店運の興廢に關するが故に委任委員諸彦の責任は重且つ大にして随つて諸彦の御心労も一方ならず殊に最近地震手問題、神戸市電問題、松昌洋行問題等の

際水島校長にこのことを申しあげて三井物産に推薦して頂きたいとお願した。ところで水島先生は、「君の約束を守りたいという精神は尊重するが、実は鈴木商店の金子さんからは是非君を寄越してくれ」と頼まれて、実は内諾している。三井の方は自分から了解を求めるから、鈴木の方へ入社してもらいたい、金子さんが特に囑望しているんだから、その意気を感じて働き給へ」とのことで鈴木に入社した。天下の三井に並ぶ鈴木なら以つて身を寄するに足る大木だ、いわんやその実力者で同郷の大先輩たる天下の金子さんに知遇を得た

のだから僕は文字どおり一生懸命に働いた、その鈴木商店が昭和二年に忽ちつぶれた、天下の三井と肩をならべて世界的に大規模の外国貿易を行つて大規模の崩壊するとは夢想だに及ばなかつた、このため金子さんは責任辞職の型

内憂外患交々たるありて之に對する御心労御焦慮も洵に大なるものあらんと窃に拝察するとともに、その御苦勞に對し深甚の敬意と感謝を表する次第なり。爾來時を経みすること既に五十有五日扇港灣頭浪徒らに吼え六甲山頭風徒に叫べども東奔西走せる諸彦よりは何等の吉報の到るなく、加え東西の新聞紙、経済雜誌等は早くも鈴木商店の金子重役の引退等々の記事の掲載せらる、ありて吾人は果して其後の経過如何と憂慮するものなるが更に目を店内に転ぜんか東に杞憂するものあり西に画策するものあり、形勢混沌人心競々として浮動し真に内憂外患交々たる状況にして、若しこのまゝに推移せんか店運知るべきのみ、吾人愛店の士いづくんぞ安閑として拱手傍觀せんや、然れども吾人はあくまで諸彦を信頼し再協議あるまでは決して輕率盲動すべからざるものと確信し、天行決して健ならざることを憂慮しながらもひたすら隠刃自重して今日に到れり。本日委員諸彦よりお話あるによりここに列席したり、吉か凶か興か廢か全店数千の社員が歡喜に轟くか悲痛に慟泣するか吾人は異常の緊張を

となつた。大木の下敷きになつたとき、いろいろ調べてみると我々の凌霜の先輩たちのインテリと丁稚からたきあげた金子さんとの思想的ギャップによる争いがもとでは、お家騒動がもとで、この弱点につけてこんで打倒鈴木を目論んだ競争者の陰謀と金子さんの政商的行動にあきたらずとしていた債権者台湾銀行主脳部との共同戦線であつたのが真相であつた。僕はあくまでも鈴木の子か金子の子か鈴木かといわれた両者は不可分だ、金子さんが去つたら鈴木は危いと叫んで、社員大会で大演説をぶちまくつた、この大会は僕の熱弁で押しまくつて表面は金子さんに留任嘆願となつておさまつた。しかしアンダーカレントは筋書きどおり進んだ。大会場のドアをあけて出ると先輩のT氏が僕を別室に呼びこんで「神戸の学校の先輩諸氏で金子さんのいない跡は充分に合理的に経営することになつてい

るのだ、君は何んにも知らないのか、あんな議論をしては駄目じゃないか」とひどくたしなめられた、私はこの熱弁がたたつてその直後カルカッタ支店へ遠島を命ぜられ

もつて御報告を待ちたり、然れども不幸にして諸彦の報告はきわめて形式的にその不結果なることを報ずるのみ、しかも事前に再協議すべしと確約をしながらすべては事後に終り、吾人は何等なすこと能はず徒らに一致団結の巨弾を擁したるまゝ、呼ばんとする舌は減せられ打たんとする腕は搏せられ唯義憤と復讐の熱血が高鳴りつ、流れ、果たして此の結果が店運を興隆せしめる所以か迷いながら熱涙滂沱としてくだるのみ。日月光を失して百鬼夜行人道地に落ちて塵埃のごとし、嗚呼何ぞ静思するに堪えんや、敗軍の將敢えて兵を語るにあらざるも若し諸彦にして、こと此処に到らざる間にお約束の如く再度御協議下さらば所謂挙店一致の巨弾をもつてこの危機に当れば大廈の崩る、を一木をもつて支うることも敢えて困難にあらざるべくかつ又吾人一人抜刀すればこの危機を救うことを得べかりしに、嗚呼然れども全ては過去といふ再び帰らざる事実となり今更ら吾人の微力の如何とも動かすべからざること、なりたり。嗚呼万

た、本社がつぶれる瀬戸ぎわに支店転任命もおかしなもので、これは体のいいつめ腹であつた。僕は一夜再考熟慮した結果、男子はすべからず進退を明にすべしとの教訓を顧み、たゞちに筆をとつて辞表を出した。これは忘れもしない昭和二年三月十七日のことである。僕は辞表を奉書に認め聲明書をも奉書に認めて重役に提出して、犠牲者のナンバーワンとなつた次第である。この聲明書は僕の青年時代の忘れがたい記念品だから後日元重役から貰うけて表具して今において家宝として保存している、少々長いがか、にかかけて若かりし時代を回顧したい。

「昭和二年一月廿二日突如金子重役の辞意を聲明せらる、これ実に晴天の霹靂にして吾人は唯だ茫然として自失し、極力その真相の探究に努めたるも何故か重役支配人とも詳細なる説明を忌避したるため其真相を知ること能はざりき、然れども吾人は鈴木商店と金子重役とは創立以来不可分なりしとにも未来永却不可分ならざるべからずと確信して疑はざるが故に敢えてその理由を詮索する必要なく、直ちに満場一致を以つて絶対的無

と御心労に對し重ねて衷心の感謝を奉呈す。顧みれば大正八年好景氣の絶頂のころ自分は三井物産カルカッタ支店に採用に決定せるを南氏を介し金子重役の知遇を受け氏の人格に私淑し所謂男子意気に感ず功名何ぞ選ばん底の意気をもつて入店し爾來すでに九年、意気は壯なるも微力浅才何等なすところなく洵に慚愧に堪えず、將來大いに奮闘しご期待の万分の一にても添い奉らんと覚悟せしに、事ここに到りては何の意義、何の意気をもつて店における生命を維持せんや、すでに活動の意思を失は、身はあたかも蟬の脱殻のごとし、何の面目ありて在店せんや、ここに正直に自己の立場と信念を披瀝し骸骨を乞いて永久にお暇を賜らんとするものなり。今や世は一陽來福の初春にいたり百花將に開かんとし百鳥また争鳴せんとすれども造花の神は吾に幸せず徒らに風蕭々駅水寒し壯士一度去つて亦帰らずの挽歌を詠ましむのみ。終りにのぞみ店中微々たる自分に対し過分の御好意を与えられ御鞭撻御指導下されたる御本家、重役、支配人以下の方々に対し深甚の感謝を呈す

るとともに尚お将来の御指導御交誼を賜らんことを願います次第なり、冀くば御芳伝賜らば幸にすぎず。尚お自分の推薦により入店したる田中四郎、太宰正己、三木秀次、松岡福吉、渡辺昭等は全然自分に関係なく永久にお店のために働くよう申しおきたれば御同情の上特別の御引立たまわらんことを願います。

(昭和二年三月十七日夜、摩耶山の晩鐘を悲痛に聞きつ、

鉄材課 久 琢磨)

僕はこの年店はやめる、長女には大病に罹られるの大厄で悲観のどん底に陥いついていた、しかし人間万事塞翁の馬とやらで、その夏大先輩石井光次郎先生のお蔭で東京朝日新聞社に入社し、昭和六年には抜擢されて年令僅か三十五才で大阪朝日の庶務部長になり、その恩義に感じて粉骨砕心働いた、しかしこの朝日も昭和十九年に退かざるを得なくなつてまた元の古巣の鈴木系の神戸製鋼所に帰った。僕は最初に述べたように進退を重んずること人一倍強いと自覚している朝日を辞するに当つてもその進退を明らかにしたかつたが、

これを明らかにすると社長以下重役の面目にかゝるようになるので本意ならずも無言で退社した。今でも何故やめたかと不審がる友人もいるほど僕の退社は？ であつた。しかしそれから既に二拾年

神戸の消防史異聞

神戸米騒動記

■大正七年の熱い夏

「市中の半鐘はジャンジャン鳴り出した。それは爽快な景物にそえる音楽のようでもあつた。

消防隊が四方から駆けつけてきたが、一滴の水も筒先から出さずとは出来なかつた。

消火栓には抜刀した男がさえぎつて寄りつくことは出来なかつた。やつと一本、遠くの個所から水を通すことが出来たが、これも瞬間に誰かがそのホースを途中で切つたので水は無益な地面に流れているだけであつた。

「黒い米(武田芳一)のじごく文庫」の「神戸の米騒動」を背景にした鈴木商店焼打ちのシーンである。六十年前、一九一八年(大正

と経過し何事も時効にかかつたし僕も棺に入る前にはこのことだけは明らかにしておきたい、幸に同級会誌なら許してくれると思うから次の号で「朝日を辞めた真相」を明らかにしたいと会願している。

七年)七月の「越中女一揆」が発端で、およそ五十日余にわたつて全国六百か所、工場労働者、農漁民など、低所得者層など百万人を越える人々が、ある所では軍隊・警察の血の弾圧とはげしくたたかひながら、支配階級をふるえあがらせた未曾有の大衆暴動、それが米騒動である。

一九一四年(大正三年)、第一次世界大戦が勃発し、日本の輸出はうなぎのぼりに増加し、重化学工業を中心にして工業生産は数年で二倍ちかくになり、成金という言葉ができたのもこのころである。一方、国民大多数の生活はどうであつたろうか。繁栄の本源とされた連年の出超貿易、急激な設備投資、歳出の半分以上におよぶ軍

事費の支出、そのほか資本家の利益を手あつく保護した国家の財政措置などは、すべて人民の負担によつて行われ、はげしいインフレーションの物価上昇をひきおこした。(阿部真琴「兵庫米騒動記」)

■米騒動の直接原因

米騒動の直接原因について、前出の「兵庫米騒動記」は、次のように述べている。

「戦争下という事情があり、そこにインフレ政策、一般的に物価騰貴があつた。一中略一米の生産費が高くなり、一中略一資本主義の急激な発展とともに、米の消費は増大する。インフレの進行といふまに値上がりを見こした地主は米の隠蔵をはじめ、米商人は買占めと投機に熱中した。

一方地主をバックにする政府は、外来輸入関税を固守し、輸入にあつた三井物産や鈴木商店に独占的にこれをおこなわせ、かれらに巨大な利益をあたえた。

一九一八年七月、日本はシベリア出兵を決定した。米価はいよいよあがつた。

一方、神戸の低所得者層の生活は、どうであつたろうか。戦争景気で、工場労働者や港湾

労働者が各地からどつと流れこんだ。

前出の「兵庫米騒動記」では、「このあいだに市民一般の生計費も異常に膨張した。

まず市の人口は、一九一四—一九一八年に四万五千から六万三千四千と四割ちかく増加し、それは労働者の増加とほぼ一致する。その中で寄留者は一七万五千から二一萬四千に増加し、てきめん住宅不足と家賃引上げがおこつた。」

それでは、米価はどのように上つたのであろうか。「一九一七年の五月ごろからじりじりあがりはじめ、一八年春からそれが急ピッチになり、夏には天井しらずの状態になつた。

これを、当時門司について全国二番目だつた神戸市の小売米価でみると、まず年平均では一七年、石二五円四〇銭。

一八年、三九円五〇銭、一九年四八円四三銭であり、一八年七、八月には、赤三等(普通米)一升が七月二日三四銭五厘、一六日三六銭八厘、二四日三七銭九厘、八月一日四〇銭七厘、四日四三銭五厘、七日五五銭三厘、八日六〇銭八厘になつた。わずか一か月余で二倍弱になつたわけである。

これに対する労働者の平均賃金(日給)は

一九一七年男六十七銭女三十三銭
一九一八年男九十二銭女四十八銭
にすぎなかつた。だから、一七年はじめから労働者の賃上げ闘争が激化し、争議が続発していった。

「兵庫米騒動記」
そして労働者の流入によつて、労働力の買手市場となつたことも見逃せない。

さて、一九一八年(大正七年)八月十一日から始まつた神戸の米騒動は出兵した姫路第十師団の隊と警察によつて、十七日には鎮圧が確認された。

この暴動の最盛期の模様を、神戸新聞号外は、次のように伝えている。

■遂に流血を見る

暴徒四名刺し殺され、重軽傷者無慮数十名更に相生町の放火騒ぎと神戸の大暴動は、十三日夜に入りて遂に流血の惨を見るに至れり。則ち当夜十時過ぎ湯浅商店襲撃の途上、元町三丁目附近を警戒する一憲兵が暴民十数名のために胸上げにされ、危急の状態に陥りしかば、出動中の軍兵数名、現場に駆けつけ、これを救助せんと

したるに、日本刀を携へたる二三、四歳の一兇徒は、矢庭に抜刀して、軍隊に斬込み来りたるにぞ、軍隊側においても、防衛上反抗の余儀なきに至り、銃剣を該兇徒の胸部に擬して一突きたるも、容易に怯む色なく、尚ほも兇器を振り廻す狼籍に更に二突き抉りて脾腹を貫き遂にこれを即死せしめたり。

又これより先、有馬道筋三つ輪牛店を襲はんとしたる一凶漢は、警戒中の一兵士に対し、「見事突けるものなら突いて貰はう」

などと盛に厭がらせを言い、公務を妨碍すること一方ならざるより、これ亦兵士の携帯せる銃剣にて胸部を刺され、摂津病院に収容したるも程なく絶命せり。

尚ほこの他湯浅商店外一ヶ所に銃剣にかり死亡したるもの二名及び警官群集に数十名の重軽傷者を出したり。而して十四日午前一時二十分となるや相生町四丁目種物商大井駒蔵方へ数名の暴徒乱入し、火を放ちて瞬く間に同家を全焼せしめたが、同夜は消防の不行届き居りし為め、被害は同家のみに止まりたるは幸ひにして犯人の一人は直

に相生橋署の手に逮捕されたり。

尚ほこれと相前後して兇徒は兵庫署、安養寺、湊川神社、共立橋等を襲撃したるも、軍隊警官のため撃退せられたり。

(句読点以外原文のとおり)

(神戸新聞号外/大正七年八月十四日)

■米騒動と消防

「やい、日本樟脳に水かけたら(放水)承知せんぞ。」

かけつけた消防隊に対して、馬引消防ポンプ車の上に陣どり、抜き身を振り回す暴漢。

そして「類焼せんように民家に放水せよ」という。当時、現場を見た日本画家・水谷吉晴さん(北区在住)の証言。ただし、水谷さんは、暴漢を壮士と表現しているが……。

この米騒動で放火された神戸市内の建物・損害等は、次頁のとおりである。

鈴木商店は、米の買占めをうらまれて群集に襲われたものだが、神戸製鋼も日本樟脳も鈴木さんの下であつた。兵神館は、家賃取り立て会社、不動産会社で、名前は変わっているが、今でも神戸市内